

ケニア、マザレスラムにおけるエコツーリズム開発

北海道大学大学院 環境科学院

環境起学専攻 統合コース

菊本 光子

【背景・目的】 ケニア共和国は東アフリカで中心的役割を果たす一方で、旱魃や大雨などの自然災害、政府内部の腐敗、急激な人口増加等の課題を多く抱えており、貧困の削減を重要課題とする国際社会にとっても更なる注目が必要な国である。ケニアを含む途上国に対して従来行われてきた開発援助は、受益者である貧困国の住民に主導を置かないものが多かったために、持続的な発展を促進出来なかったばかりか、逆に依存を高めることにもつながっていた。そこで本研究では開発途上国における住民主導の持続可能な発展のあり方を探るために、ケニアの首都ナイロビのマザレスラムにおける住民活動の実態を調査し、住民と共に、活動の更なる改善を目指すことを目的とした。また、持続的開発の一手段として、観光立国であるケニアの中で大変危険な地域とされている都市スラムを未開発の観光資源ととらえ、そこにおけるエコツーリズムの実施可能性の検討も行う。

【研究手法】 本研究では、マザレスラムにおいて長年、住民主導の活動を推進してきたマザレ・コミュニティ・リソースセンター（MCRC）の中心メンバー3名を聞き取り調査の対象とした。聞き取り調査は2008年8月～10月に5回行った。聞き取りに基づき、2008年9月12日～13日の2日にわたり日本人大学院生3名の参加者を対象としたモデル・エコツアーを実施した。続いて、9月21日に日本人観光客等6名の参加者と共に2回目のモデル・エコツアーを実施した。2つのモデル・エコツアーにおいて、ツアーの事前事後に参加者のアンケート調査を行った。さらに、ツアーの改善へ向けた資料作りのために、2008年9月23日から10月7日にかけて、マザレスラムでの現地調査を行った。歩測とコンパス、ハンドレベルを用いて、エコツアーを行ったルート沿いのマッピングを含む地理学的調査を行った。

【結果と考察】 聞き取り調査の結果、MCRCが直面している資金調達、外部との関係強化、地域主体の開発への理念浸透と実践、という三つの主要課題が明らかとなったが、そのいずれに対しても、エコツーリズムは有効な対処法として期待され、マザレスラムにおけるエコツーリズムのニーズが確認できた。そこで、2組のグループを対象にしたモデル・エコツアーを実施した。1回目のツアーではMCRCのガイドによるスラム内の案内、住民との歌や踊りでの交流を行った。2回目では、MCRCのガイドによるスラム内の案内を行った。また、モデル・エコツアーで使用するガイドブックを作成し、ツアー後、アンケートの結果等を参考に改善を試みた。MCRCへの聞き取り調査、モデル・エコツアーにおける観察、ツアー実施後の参加者とMCRCとの話し合い、参加者のアンケート結果から、エコツアーの参加者とスラム住民の双方が、相互理解を求めていること、またそのような理解促進の機会としてのエコツーリズムの可能性が期待されていることが明らかになった。さらに、住民主体の開発活動においても、住民と対等の視点に立つ限り、外部の者が果たせる役割も存在することが分かった。加えて、過去にMCRCが催したワークショップの結果や、モデル・エコツアーの結果、聞き取り調査の結果から、スラムがエコツアー対象地としてキャパシティーを持ち、エコツーリズムが、住民の考える「開発」の手段の一つとして有効であり、また今後スラムエコツーリズムを継続する主体として、MCRCがふさわしい、と考えることが出来た。しかし、マザレスラムのコミュニティの構造、エコツーリズムを行った際の対象地域の関係者への影響や効果などの調査課題も多く残されたため、今後は、住民への直接の意識調査や、マザレスラム全体に関する詳細な調査が望まれる。